Report
［査読無し］ 報告

うるがんとSafioye
―悪役の系譜―

Urugan and Safioye
―A genealogy of boogeymen―

渡邉 顕彦[1]，楠瀬 由夏[2]
[1]大妻女子大学比較文化学部，[2]大妻女子大学大学院人間文化研究科言語文化学専攻日本文学専修

Akihiko Watanabe[1], Yuka Kusunose[2]
[1]Department of Comparative Culture, Otsuma Women's University
[2]Graduate School of Studies in Human Culture, Master's Program for Studies in Language and Culture, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：キリシタン研究，仮名草子，イエズス会演劇
Key words：Kirishitan studies, Kanazōshi, Jesuit theater

抄録

この報告はキリシタン時代のイエズス会士グネッキ・ソルディ・オルガンティーノ（1532-1609）と江戸時代初期の長崎奉行長谷川藤広（1567-1617）を歴史的人物および文学的ペルソナとして比較する。前者は16世紀終盤のキリシタン宣教の（短い）黄金時代をもたらし、後者は17世紀初頭の禁教令とキリシタン大追放の地ならしをした、それぞれ所属した側に多大な貢献をした、しかしより高位な者たちの陰に隠れ現在は有名といいがたい歴史的人物である。ただ文学的ペルソナとしては、前者は江戸時代の排耶蘇文学においてザビエル（1506-1552）やヴァリニャーノ（1539-1606）等より有名な人々の要素を取り入れ全宣教師を代表するかのような存在であり、また後者は渡邉が近年コブレンツで採録した複数の劇作品でキリシタン迫害の発案者、日本における最大の弾圧者であるかのように描かれている。両者は中間管理職的な役割を担い大きな成果を挙げた者たちとして、公的な歴史からは忘れられがちだが敵方の民間伝承には大きな印象を残したという点で似た者同士である。

1．はじめに

日欧交流史を論じる際、16 世紀半ばから 17 世紀半ばにいたるいわゆるキリシタンの世紀[注1]は外せない。16 世紀半ばより前にも、マルコ・ポーロにより日本情報がヨーロッパに伝えられていることはおそらく事実であり[注2]、また明治維新以降、現在に至るまで様々な局面において非常に活発な日欧交流が確かに行われてきたことは否めない。しかし 16 世紀半ばから 17 世紀にかけて、イエズス会やそれに続くいわゆる托鉢修道会によって現在も学術的に高く評価される日本文化の詳細な記録が作成されて広く西欧に紹介され[注3]、また日本人に対してもキリスト教教義だけでなくラテン語、絵画作成、天文学等[注4]を含む幅広い西洋文化の教育が施されていたことも忘れてはならない歴史の一局面であろう。

またキリシタン宣教に対する反動として、いわゆる鎖国と禁教の時代がその後数世紀にわたって続いたわけだが、この時代にもキリシタン時代の記憶は国内外で変容しながらも生き続け、おそらく現在の様々な事象にも水面下で影響を及ぼし続けている。一つ例をあげると、キリシタン宣教とそれに続く禁教（要するに宣教の失敗）は、18 世紀以降の西洋における科学的人種差別思想の醸成にも明らかに関わっている。またその意味で、キリシタン関係の一次文献に現れる人種思想は、近現代のそれと関係がある、しかし同時に様々な点において異なるものとして、貴重かつ興味深い研

究史料を提供してくれる[注5]。

本稿では、キリシタン時代の記憶の継承と変容の具体的な例として、2 名の実在人物、および彼らに触発された文学的ペルソナをとりあげたい。1 名はイタリア人で、京都周辺の宣教統括をしていたイエズス会士、もう 1 名は日本人武士で長崎奉行であった人物である。彼ら 2 名は現在の史学等学術分野ではおおむね有能な現場指揮者であったという評価を受けているものの、同時代のより有名なその他多数の陰に隠れて知名度が高いとはいえない。特に 2 人とも、彼らが所属していた側の文学（欧州における日本宣教の喧伝や、日本における排耶蘇文学）では等閑視されいわば身内では忘れ去られた存在である。しかし両者ともに敵方の文学では、一方は日本転覆を企てる邪教の先兵、他方ではカトリック迫害を先導する悪魔の手先として抜群の存在感を示している。この 2 人はつまり悪役として敵方の印象に深く残ったという点において似たもの同士である。よって彼ら 2 名を歴史的実在人物として、そして文学的ペルソナとして検討・評価・比較することは、プロパガンダとしてのキリシタン時代の記憶継承の研究に寄与するものがあると考え、本稿をまとめるものである。

2．うるがん

2.1.　Organtino Gnecchi-Soldo　（1532-1609）

イタリア北部古都ブレシアの近くで 1530 年代に誕生したオルガンティーノは、20 歳代にはカトリック司祭になっており、設立されてから 10 数年しか経っていない新設修道会であるイエズス会には 1556 年前後に入会した。入会後彼はローマ近郊フラスカーティにおけるイエズス会コレジオ設立に関わり、イエズス会の中心的高等教育施設であるコレジオ・ロマーノで学識を深め、また 1565 年頃にはイタリア中部ロレート[注6]のイエズス会コレジオ院長も務めている。1540 年に設立されたイエズス会は当時、宗教改革に揺れるカトリック界に新風を巻き起こす存在として広く期待を集めていたが、オルガンティーノもこの若い団体に集う熱意あふれる、そして将来を嘱望される若者の 1 人であった[注7]。

このイエズス会創立に携わった 1 人であり後に同会創立者と共に列聖されたフランシスコ・ザビエル（1506-1552）もよく知られているように 1549 年、日本に上陸し、約 2 年間の日本宣教の間に複数の書簡を執筆し、同会の東方宣教熱を煽っていた。オルガンティーノもザビエルや彼に続く会士が書き送る情報に触れていたはずで、自ら東方宣教を志願し認められ、1566 年から翌年にかけてポルトガルやアフリカを通過しインドのゴアに至った。ゴアではおそらくイタリアにおける経験が認められ、同地のイエズス会コレジオ院長職を任されている。ただオルガンティーノにとってゴアは通過地点であって、1569 年には彼はさらに東、マカオに移動し、翌年にはやがてそこで骨を埋めることになる日本に到着している。

日本で彼は当時の日本布教区責任者カブラルとは対照的に、宣教師側が現地文化に合わせる順応策を推進したことで知られる。この意味で彼は後、1579 年に来日する有名な巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）の方針を先取りしていたわけだが[注8]、自身は終生、カブラルのような日本全体の責任者になることはなかった。

日本滞在の最初の 2 年ほどをオルガンティーノは日本語や日本文化、特に仏教の学習に費やした。1570 年代半ばに彼は京都周辺の布教を任されていたが、ちょうどこの時期に織田信長（1534-1582）もいわゆる天下人への道を歩みつつあり、日本文化、日本語などの知識を利用し信長やキリシタン大名として有名な高山友照（？-1595）・右近（1553-1615）の知己を得たことが彼の続く活躍の基盤となった。1577 年に信長の許可も得て京都に新たな教会を献堂し、1580 年にはさらに巡察師ヴァリニャーノの後押しも受けて信長の城下町安土で日本人を教育するセミナリヨを設立、その初代院長に就任したことは彼の特筆すべき業績であり、この時期がイエズス会士としてのキャリアの絶頂期といえるだろう。また当時彼が天下人信長と面会できるという、驚異的かつ反キリシタン派にとっては脅威とみなされる立場にあったことが後の文学的ペルソナうるがん誕生の背景にある。

ただよく知られるように 1582 年の本能寺の変で安土は焦土となり、ここのセミナリヨも壊滅した。天下人として信長を継いだ豊臣秀吉（1537-1598）は当初キリシタンに好意的でありオルガンティーノも京都布教に再度携わるようになったが、1596 年、いわゆる 26 聖人殉教以降の迫害激化を食い止めることはできなかった。この時期に彼もよりキリシタン人口が多く安全と思われた長崎周辺に移り、そこで 1609 年に没している。

オルガンティーノは 1570 年代の京都周辺の政情を見聞きしていた貴重な西洋側の証人であり、彼の書簡は以降、現在に至るまで歴史史料として多用されてきた[注9]。また日本のキリシタン研究では適応主義を極めた人物として賞賛されることが多い[注10]。しかし当時の日本の文化や言語にオルガンティーノが詳しかったことは疑いないものの、彼自身書簡以外には目立った記録を遺さなかったかったことから、同時代のルイス・フロイス（1532-1597）[注11]や、若干年代が後のジョアン・ロドリゲス（1561-1633）[注12]と比較すると影が薄いことも事実である。またキリシタン時代日本におけるイエズス会史ではザビエルとヴァリニャーノの存在感がやはり圧倒的に大きく、日本全体の責任者にすらならなかったオルガンティーノはこの点でもあまり注目を集めない。ちなみに後で紹介する近世ヨーロッパにおける日本宣教に関する演劇作品でもキリシタン側で描かれる人物は圧倒的に列聖されたザビエル、あるいは信徒の模範とされる日本人殉教者であり、オルガンティーノのような、殉教しておらず列聖もされていない会士はまったくといっていいほど取り上げられていない[注13]。

2.2.　仮名草子のうるがん

このようにキリシタン側の文学では影の薄いオルガンティーノだが、江戸時代日本における排耶蘇物語文学の代表作とみなされる『吉利支丹物語』（1639）、およびその再版である『吉利支丹退治物語』（1665）において彼は「宇留合無伴天連」（うるがんばてれん）として、ザビエル、ヴァリニャーノ等を押しのけて宣教師代表として日本に一番乗りを果たしている。ちなみに「うるがん」はオルガンティーノ自身が使っていた彼の名前の日本語読みである[注14]。

先行研究者達が指摘しているように、文学的ペルソナうるがんは日本の天狗や入道など、複数の怪物の伝統やザビエル等宣教師達のイメージが混合され創り出されたキャラクターである[注15]。『吉利支丹物語』によれば彼は「弘治の年号（1555-1558）のころ」、邪教を広めるために日本に上陸したということになっている。目は大きく、鼻は貝を合わせたように高く赤く、肌は黒く、背は異様に高いという、如何にも邪悪で要警戒な人物という風体で描かれている[注16]。再版の『吉利支丹退治物語』ではこの記述に沿った、周囲の日本人とは全く異なる（しかし服装だけは日本人らしくしている）うるがんの有名なイラストもある[注17]。日本語学習や現地における意思疎通が宣教師にとって大変困難であった、宣教をする準備として宣教師は来日後、じっくり日本文化を観察し学習した、というような続く記述も実はザビエルや続くイエズス会士たちに関するヨーロッパ側の記録と合致しており興味深い[注18]。

『吉利支丹物語』はさらに続けて彼が高山右近など重要人物をたぶらかし、やがて多数の配下を引き連れ豪華な贈り物と共に信長に面会するということになっている。このあたりは、高位の巡察士として、インド等で準備を整えた豪華な贈物を携えて信長や秀吉に面会したヴァリニャーノの記憶も混入していると思われる[注19]。うるがんがこの物語で登場するのは前半のみで、後半はこの作品成立の直接的なきっかけであったと思われる島原の乱の記述が主になる[注20]。

『吉利支丹物語』は明らかに虚実取り混ぜた排耶蘇文学、一定の方向性をもったプロパガンダであり、その意味で後で取り上げるヨーロッパのカトリック圏で作成消費された日本宣教を喧伝する文学と好対照をなすものである。プロパガンダ文学の中で、受容側（近世の日本民衆）の文化的文脈、いわゆる「期待の地平線」に沿った記憶の変容やカリカチュアは普通にみられる現象であり、この観点からうるがんという、複数の実在した宣教師たちの記憶および天狗のような伝統的土着怪物から創作されたモンタージュ像も理解すべきだろう。しかしザビエル、ヴァリニャーノ、フロイスのような、今日一般に広く知られ取り上げられるような宣教師ではなく、オルガンティーノという比較的無名の人物がこのプロパガンダ文学では全宣教師を少なくとも名前のレベルでは代表していることは興味深い。『吉利支丹物語』の作者は不詳で作成環境も判然としないが[注21]、作者がアクセス出来たキリシタン関係の情報源においてはオルガンティーノが相当大きな存在として意識されていたのだろう。織豊時代の京都周辺、特に社会の上層においては、日本語を操り 2 人の天下人に度々面会し、卓越した社交能力でもって教会や学校の設立許可まで得ていたこのイタリア人イエズス会士がそれほどまでに強烈な印象を残したのもさして不思議ではない。

３．Safioye

3.1.　長谷川藤広左兵衛（1567-1617）

長谷川藤広という名を今日聞いて誰かすぐ分かる者は相当な歴史マニアであろう。徳川家康の側室奈津（1581-1660）、通称お夏の方の兄であると言ったほうがわかる人がはるかに多いと思われる。後述するように彼はヨーロッパの日本宣教関係の文学では有名人なのだが、そちらの記述によると彼は卑しい大工の家に生まれたが妹が家康の妾となったため出世したということになっており、日本の近現代の史書でもこの説に従うものがある[注22]。しかし別の日本側記録では彼の父藤直（1522?-1581）も零落してはいたが地方豪族の出身ということであり[注23]、藤広と奈津のほか、長男重吉（?-?）も幕府の要職を任されていたことを勘案するとそれほど低い身分の出身ではなかったと考えるのが自然である。

ちなみに長谷川藤広は長崎奉行としての活動によってキリシタン側にも知られているわけだが、この長崎奉行職は江戸時代を通してみれば日本の対外政策および邪宗対策を担うことにもなった相当な重職であった。そもそも長崎が港湾都市となったのもイエズス会がここを宣教、そしてそれを日本で財政的に支えるための商業（表向き同会は商業活動を直接行ってはいけないことになっていたので、これは大変微妙な組み合わせだったのだが）の拠点として整備した（あるいはその整備を脇から緊密に支えた）からである[注24]。その後紆余曲折あってイエズス会は放逐されたわけだが、中国やオランダとの交易がやがてここに集約されるようになり、江戸時代を通じて長崎奉行は貿易から得られる様々な（時には相当グレーかつリスキーな）役得が期待できる一方、外国人の活動を厳重に監視しキリシタン邪宗の復活が絶対起きないよう警戒するという、大変ユニークな組み合わせの職務を担うことになったのであった[注25]。

藤広は数え方にもよるが 2 代目あるいは 3 代目奉行[注26]として 1606 年から 1614 年まで在任し、長崎および周辺地域のキリシタン勢力排除を進め、後に完成された禁教・鎖国体制の素地を一定部分作りあげた実力者と評価されている。特に 1609 年のいわゆるマードレ・デ・デウス事件から 1612 年の岡本大八事件にかけて、長崎周辺で勃発したポルトガル人および日本人キリシタン同士の内紛を彼が利用・操作して最終的には当事者全員を共倒れにさせ、加えてキリシタン勢力が幕府にとって脅威であるという印象を幕府中央で強化した手口は、それを目撃したイエズス会宣教師たちの間でも反キリシタン勢力のキーパーソンとしての彼の評価を決定的にしたと思われる。これら一連の事件はあまりに複雑であり事実関係に未だに不詳の部分もあるのでここで詳細には解説できないが[注27]、藤広はこの間、おそらく自身にも生命の危険が及ぶ中、ポルトガル人および日本人キリシタンたちを個別撃破していき、最終的には長崎に接しておりキリシタンの避難所となっていた有馬にも軍勢を派遣して大規模な迫害を引き起こし、ここをキリシタン大名として名高かった有馬氏から引き離し幕府直轄の天領にしてしまっている。このような地ならしが 1612 年以降のキリシタン禁教令、そして 1614 年の高山右近を含む大勢のキリシタンや宣教師の長崎からの大追放に至るわけだが、この追放も見届けた藤広は甥の権六に奉行職を引き継がせ、精力を使い果たしたのかのようにその後間もない 1617 年に 51 歳で没している。大河ドラマにも度々登場する妹の奈津が 1660 年まで生きたのとは対照的である。彼は家康や右近、有馬氏のような武家トップ層の陰に隠れて今では知名度が高いとはいいがたいが、当時の政治経済の潮流を上手に操り、幕府の意を受けて長崎の宗教的状況を一変させた辣腕の地方行政官であったと評価できる。

3.2.　近世西欧の日本関係テクストにみられる Safioye

藤広の別称は左兵衛であったが、これの当時のローマ字読みである Safioye として、17 世紀初めのヨーロッパ向けの宣教師報告やそれを受けて作成された演劇などで彼はしばしば悪魔的な迫害の立役者として登場する。イエズス会が数十年かけて営々と築き上げた、キリシタンとして受洗した大名や代官が主導しイエズス会を強固にバックアップする長崎周辺の政治経済体制を、キリシタン内部の亀裂に巧妙に楔を打ち込んでわずか数年間で瓦解させた藤広の手法が強烈な印象をもって長崎で受け止められ、悪魔的人物としてのイメージが遠いヨーロッパにも伝えられたのであろう。

イエズス会演劇など、日本の宣教を扱った近世ヨーロッパのテクスト群は現在も収集精査が続けられておりその中における文学的ペルソナとして

のSafioye像も未だ総括することはできないが[注28]、本稿筆者の一人渡邉が近年採録した、1625年ドイツのコブレンツにてラテン語で作成上演された劇でも彼が中心的な役割を果たしているので以下この作品とそれに関係する手稿を中心に論じる。

この劇は主に1613年の有馬における本多平兵衛の弟と彼の子らの殉教を扱ったものだが、この迫害の発案者としてSafioyeは登場する。ちなみに劇の初幕で、悪魔（を演じる役者）までが舞台上に現れSafioyeこそ自らの地上における代表者であると宣言している[注29]。なお史実と異なりこの劇では当時の有馬に家康が直接来て迫害を命じることになっているが、家康自身は理性的かつ中庸的な人物として、本心としてはキリシタン弾圧に消極的であるかのように描かれている[注30]。この家康にキリシタン弾圧を吹き込み決心させるキーパーソンがSafioyeである。

Safioyeが家康にキリシタンの危険性を論じる場面は大変興味深いものであって、決定的な論点はカトリック布教はスペインによる軍事征服の地ならしなのだから日本および幕府の安全のためキリシタンは徹底的に排除されなければならないというものである[注31]。ドイツ語圏におけるカトリックの拠点であったコブレンツで敵役によるものであったとしてもこのような台詞が述べられたというのは一見奇妙のようにも思えるが、実はスペインの膨張主義に対する疑念あるいは誤解が日本のキリシタン迫害を引き起こしたのであるという指摘は当時のヨーロッパにおけるカトリック側の文献でもみられるものである[注32]。またこの劇が作成上演された1625年のコブレンツは30年戦争でフランス、スペイン・オーストリア、ドイツ語圏新教勢力などの間で複雑に燃え広がる戦火に巻き込まれており、カトリック教会の第一の擁護者を自称するスペイン帝国に対する、単純な賞賛のみに限らない複雑な念は相当程度当時の聴衆に共有されていたのではないかと考えられる。ちなみにこの劇は神聖ローマ帝国選帝侯であったトリーア大司教フィリップ・クリストフ（1567-1652）と彼が招集した議会（Landtag）の面前で上演されたことが確認できている。なおフィリップ・クリストフは後にフランスやスゥエーデンの味方をし、結果神聖ローマ帝国を裏切ったとみなされ大司教座より追放されたといういわくつきの人物である[注33]。史実の藤広や宣教記録に現れるSafioyeもキリシタン同士の仲たがいを利用して彼らの勢力を突き崩したわけだが、コブレンツの劇場に1625年に登場したこの文学的ペルソナも、一方では遠い異国で活動した悪魔の使者でありつつ、他方では宗教内の仲たがいで苦しめられていた当時のドイツ語圏において様々なレベルで既視感を覚えさせる、ある意味親近感をすら抱かせるキャラクターだった可能性がある。

実はコブレンツで渡邉は、ドイツ語で書かれたSafioyeが登場する劇脚本の断片も目にしている。これは年代不詳の、幾つかの劇の下書きらしきものの集合体であるファイル番号117.711に入っている。このファイル自体が、少なくとも1世紀以上の間にコブレンツのイエズス会学院で書き溜められた（と推定される）100点近くの劇脚本手稿の中にあるのだが[注34]、ほかの劇同様、その内容や文脈が精査されていないので詳細は不明である。ただこの中でSafioyeの名が登場する劇手稿の裏側に、1661年付けの書簡の下書きもあることから、この劇も1661年前後の成立かと推定することができる。また予備的な調査[注35]の結果この劇ではキリスト教迫害で悪名高いディオクレティアヌス帝（244-311）が主要人物であるものの、またドイツ語で書かれているものの内容の一部は1625年の日本を扱ったラテン語劇と近似しており、Safioeも登場し劇中で活躍していることが明らかになっている。今後の調査が期待されるが、この1661年頃（？）のドイツ語劇では古代ローマの異教を護る皇帝と近世日本の反キリシタン奉行が悪役コンビとして夢の共演を果たしているのかもしれない。泉下の藤広も、自分が遠いライン河畔のコブレンツで古代ローマ皇帝に比肩する大悪人として劇化されていたと知ったら吃驚するであろう。

4．総括と比較：怪物化した中間管理職

プロパガンダというと近代的な香りがするが、この言葉の語源は、まさに日本等非ヨーロッパ地域における布教時に起きた様々な摩擦やほか課題の反省をこめてローマで1622年に設立された布教聖省のラテン語名、Congregatio de propagande fide（直訳すると「信仰を広めるための省」）に求められる[注36]。16～17世紀日本におけるカトリック布教状況の欧州向けの報告は、もっぱら宣教師たちが本国の支援を得るためにまとめており、また更にそれがカトリック諸国やその植民地で信徒向

けに編集されたりもし、非常にプロパガンダ性の強いものであった。そして日本における排耶蘇文学も、キリシタンの脅威を強調するものとして逆方向のプロパガンダであったことは間違いない。

キリシタン時代の記録は国内外に大量に現存するが、信徒や宣教師たち自身が作成したものを含めその大多数あるいは全てが何らかのプロパガンダ性を有している。また 1 次 2 次史料ほぼ全てがその作成や記録、継承の段階で特定のメッセージ発信のための操作、編集、加除修正の結果として現存していることは間違いない。もちろん今に至るまでの数多くの戦乱や災害等によって、また国内では迫害によって破却され現存しないものも多い。

ただこのような様々なプロパガンダ的な編集を経た記録として、キリシタン関係のものは海外のカトリック圏のものははっきりと護教的、国内の禁教時代にキリシタンでない一般聴衆向けに作成されたものははっきりと国粋的、反キリシタン的であるわけで、今後も現存するものの内容を記録・検討していくことは文化史や思想史の一環として価値がある作業ではないだろうか。特にヨーロッパに現存するものは、19 世紀半ばの開国以降の日本情報によって上書きされ忘却されてきたが、近年大場や小俣ラポ―などの緻密な検証[注 37]によりその時代的地域的な広がりが徐々に明らかになりつつある。またこれ自身かなり忘れ去られた伝統である、近世擬古典ラテン語文学に受容された日本情報は、ヨーロッパ文化の基礎であるギリシャ・ローマ古典の知られざる柔軟性を明らかにするためにも今後も検討を続ける価値があると考える。

それにしてもオルガンティーノと藤広は、後者が奉行に就任した 1606 年から前者が没する 1609 年まで同じ都市にいたという以外直接の接点はないらしいが、ヴァリニャーノや家康のような強力な上司の意を汲んで現場で大胆な改革や変化を実現させた有能な中間管理職という共通点はある。そしてオルガンティーノは 1580 から 90 年代にかけてのイエズス会が主導するキリシタン宣教の絶頂期を可能にし、藤広は 1610 年代、日本におけるイエズス会の公的活動基盤をおおむね破壊し 1620 年代以降の禁教激化の地ならしをした人物である。さらに 2 人共、味方の歴史では忘れられた存在だが敵方の叙述では悪魔的怪物として深く記憶されたという点でも共通している。例えば大学でも同僚の間では影が薄いにもかかわらず学生間では有名な教員がいたりするが、歴史でもある観点からはどうということもない人物が視点を変えると目立つ場合があるという好例だろう。またキリシタン史においては悪役ではなく英雄だが近世欧州で絶大な知名度を誇ったが日本側からは存在確認（日本名を持つ人物との同定）すらできない豊後のティトス[注 38]のような人物（あるいは文学的ペルソナ）も存在する。キリシタン史の多角的な評価は今後も多くの実りをもたらすことが期待されるのではないだろうか。

謝辞

当報告の準備・執筆にあたって大妻女子大学戦略的個人研究費（2022 年度，G2203）および科学研究費基盤（C）（2019 - 2022 年度，19K00503）の助成を受けたことを感謝いたします。

注

1　「キリシタンの世紀」という呼称やそれが指す事象については浅見, 2013, 2 参照。

2　井川, 2017, 12-15 参照。

3　岸本, 2013、スムットニー, 2019 等参照。

4　片岡, 2020、平岡, 2013 等参照。

5　Keevak, 2011、特に 23-42 参照。

6　ロレートは中東から奇跡的に移築された聖母マリアの生家があると信じられている、カトリック界そしてイエズス会にとって重要な聖地であった。例えば O' Malley, 1993, 270-271 参照。

7　この段落や以下続くオルガンティーノの事績については Carminati, 1984 や Moran, 1996, 13-14, Cieslik, 2001 を特に参考にした。

8　浅見, 2013, 119-120 参照。

9　例えば Maffei 1605, 170-179, 200 参照。

10　例えば若桑, 2008, 395-399 参照。

11　フロイスの事績については Reff, 2014 参照。

12　ロドリゲスの事績については Cooper, 1974 参照。

13　このような演劇作品や類似の近世ヨーロッパ日本宣教関係の文学で描かれる日本については Wimmer, 2005 と Oba, 2022 参照。

14　Leuchtenberger, 2013, 51 等参照。

15　Elison, 1973, 475-477 および Leuchtenberger, 2013, 16 参照。

[16] 渡辺, 1993, 33、 Leuchtenberger, 2013, 50-53 など参照。
[17] これら有名な挿絵は例えば Leuchtenberger 2013, 53, 54 に転載されている。
[18] Torsellino, 1607, 310-316 等参照。
[19] Elison, 1973, 476-477 参照。
[20] 渡辺, 1993, 39-43, Leuchtenberger, 2013, 63 等参照。
[21] 渡辺, 1993, 37, 43 参照。
[22] 外山, 1988, 95.
[23] 三宅, 1956, 76-77 参照。
[24] Hesselink, 2016, 5 等参照。
[25] 外山, 1988、鈴木, 2012、木村, 2016 参照。
[26] 木村, 2016, 20 参照。
[27] 外山, 1988, 96-98、浅見, 2016, 152-153 等で解説されている。
[28] イエズス会演劇における Safioye については Szarota, 1980, 2412 にも情報がある。
[29] Watanabe, 2023, 54-55 参照。
[30] Watanabe, 2023, 13 参照。
[31] Watanabe, 2023, 64-69 参照。
[32] ヨーロッパでこのような見方が広まる一つのきっかけとしておそらくイエズス会士二コラ・トリゴー（1577-1628）による次の記述があった: Trigault, 1623, 14-15.
[33] Watanabe, 2023, 15-17 参照。
[34] Becker, 1919, 7-14 参照。
[35] Antonia von Karaisl よりの 2021 年 9 月 16 日付個人電子メール。
[36] 浅見, 2013, 19 等参照。
[37] 大場, 2016、小俣ラポ—2023 等参照。
[38] ヨーロッパ文学におけるキリシタン武士「豊後のティトス」については例えば Wimmer, 2005, 21-22 参照。ちなみにキリシタン史においてはこのようにヨーロッパ側と日本側記録でかみ合わない点が多くあるが、必ずしも前者が全て誤っていたり捏造しているわけではなく、後者においても江戸時代を通じてキリシタンの累を恐れる等の理由により記録の抹消や歪曲が行われたため、家系図等で彼らの存在が確認しにくくなっていることにも留意する必要がある。キリシタン親族抹消のための家系図操作の例としては例えば小佐々, 2013, 58-59 参照。としてください。

引用・参照文献（和文後欧文）

[1] 浅見雅一, 2013,『概説キリシタン史』慶應義塾大学出版会.
[2] 伊川健二, 2017,『世界史のなかの天正遣欧使節』吉川弘文館.
[3] 大場はるか, 2016,「近世ドイツ語圏南部の「宗派化」と日本のキリシタン：演劇に見られる宗派的規範の継承と「他者」の表現」『歴史学研究』941: 33-42.
[4] 小俣ラポ—日登美, 2023,『殉教の日本—近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』名古屋大学出版会.
[5] 片岡瑠美子, 2020,「長崎コレジヨの記憶」片峰茂監修『長崎の岬 II』長崎文献社, 48-70.
[6] 岸本恵実, 2013,「キリシタン語学の辞書」豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店, 224-245.
[7] 木村直樹, 2016,『長崎奉行の歴史苦悩する官僚エリート』角川選書.
[8] 小佐々学, 2013,「福者中浦ジュリアンと中浦城主小佐々氏の家系—中浦城主家子孫に伝わる「源姓小佐々氏系図」について—」『キリシタン文化研究会会報』142: 43-77.
[8] 鈴木康子, 2012,『長崎奉行等身大の官僚群像』筑摩選書.
[9] スムットニー祐美, 2019,『茶の湯とイエズス会宣教師—中世の異文化交流—』思文閣.
[10] 武野要子, 1990,「はせがわふじひろ 長谷川藤広　一五八七-一六一七」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 11』吉川弘文館, 556.
[11] 外山幹夫, 1988,『長崎奉行:江戸幕府の耳と目』中公新書.
[12] 平岡隆二, 2013,『南蛮系宇宙論の原典的研究』花書院.
[13] 三宅英利, 1956,「長崎奉行長谷川左兵衛論考—近世外交政策の一考察」『史淵』69: 75-97.
[14] 若桑みどり, 2008,『クアトロ・ラガッツィ（上）天生少年使節と世界帝国』集英社文庫.
[15] 渡辺憲司, 1993,「仮名草子とノンフィクション」白石良夫・法月敏彦・渡辺憲司編『江戸のノンフィクション』東書選書, 25-50.
[16] Becker, W.J., 1919, *Gesammelte Beiträge zur Literatur- und Theatergeschichte von Coblenz*, Koblenz: Krabbeusche.
[17] Carminati, di S., 1984, *P. Organtino Gnecchi Soldi s.j.: "Il secondo Padre della cristianità*

Giapponese", Bagnolese: Bagnolo Mella.
[18] Cieslik, H., 2001, 'GNECCHI-SOLDO, Organtino.', C.E.O'Neill ed., *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús*, Madrid: Universidad Pontificia Comillas, 1744.
[19] Cooper, M., 1974, *Rodrigues the Interpreter: An Early Jesuit in Japan and China*, New York: Weatherhill.
[20] Elison, G., 1973, *Deus Destroyed: The Image of Christianity in Early Modern Japan*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
[21] Hesselink, R.H., 2016, *The Dream of Christian Nagasaki: World Trade and the Clash of Cultures, 1560-1640*, Jefferson, NC: McFarland & Company.
[22] Keevak, M., 2011, *Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
[23]Leuchtenberger, J.C., 2013, *Conquering Demons: The "Kirishitan," Japan, and the World in Early Modern Japanese Literature*, Ann Arbor, MI: University of Michigan.
[24] Maffei, G., 1605, *Historiarum Indicarum Libri XVI*, Antwerp: Martin Nuyts.
[25]Moran, J.F., 1993, *The Japanese and the Jesuits: Alessandro Valignano in sixteenth-century Japan*, London: Routledge.
[26] Oba, H., A. Watanabe, and F. Schaffenrath, eds., 2022, *Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Receptions, and Regional Contexts*, Leiden: Brill.
[27] O'Malley, J.W., 1993, *The First Jesuits*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
[28] Reff., D.T., 2014, 'Critical Introduction', R.K. Danford, R.D. Gill, and D.T. Reff eds., *The First European Description of Japan*, 1585, London: Routledge, 1-30.
[29] Szarota, E.M., 1980, *Das Jesuitendrama im deutschen Sprachgebiet II.2*, Munich: Fink.
[30] Torsellino, O., 1607, *De vita B. Francisci Xaverii*, Lyon: Petrus Rigaud.
[31] Trigault, N., 1623, *De Christianis apud Iaponios Triumphis sive de gravissima ibidem contra Christi fidem persecutione exorta*, Munich: Sadeler.
[32] Watanabe, A., 2023, J*apan on the Jesuit Stage: Two 17th-Century Latin Plays with Translation and Commentary*, London: Bloomsbury.
[33] Wimmer, R. and A. Hsia, eds., 2005, *Mission und Theater: China und Japan auf den deutschen Bühnen der Gesellschaft Jesu*, Regensburg: Schnell und Steiner.

Abstract

This report compares Organtino Gnecchi-Soldi (1532-1609), the Jesuit missionary who helped usher in the (brief) golden age of evangelization in late 16th-century Japan, and Hasegawa Fujihiro (1567-1617), the Governor of Nagasaki who prepared the grounds for the mass expulsion of Kirishitan in the early 17th century, as historical and literary characters. The two figures both appear as memorable, even primary, evil agents in hostile contemporary narratives though as historical figures they are little known today. Organtino takes the place of much more famous figures like Xavier (1506-1552) and Valignano (1539-1606) as the representative of a diabolical cult in Edo-period anti-Kirishitan literature, while Fujihiro features prominently as a leading persecutor in several plays produced in Koblenz whose scripts were recently uncovered by Watanabe. In sum, they were both competent middle-rank managers in their respective enterprises who seem to have left much deeper impressions on their adversaries than those for whom they worked.

（受付日：2023 年 6 月 25 日，受理日：2023 年 7 月 26 日）

渡邉　顕彦（わたなべ　あきひこ）
現職：大妻女子大学比較文化学部教授

Yale 大学大学院 Classical Philology 博士課程修了、博士号取得。
専門は西洋古典学。現在は近世擬古典ラテン語文学における日本情報の受容に焦点をあてた研究をしている。
主な著書：Japan on the Jesuit Stage: Two 17th-Century Latin Plays with Translation and Commentary（単著, Bloomsbury）